

第91回緩和ケアチーム抄読会

2011年8月3日

担当:田中 康代

がん患者が望む「スピリチュアルケア」 89名のインタビュー調査

森田達也、赤澤輝和、難波美貴ほか

精神医学・52巻11号：p1057-1072：2010年11月

【背景】

精神的苦悩は、患者にとって著しい苦痛となり、希死念慮、安楽死・自殺幫助の要請、尊厳の喪失、絶望、鎮静を考慮する苦痛の原因となる。したがって精神的苦悩を緩和することは重要である。しかし、精神的苦悩に対して有効なケアについての実証研究は限られている。我が国のがん患者を対象にして、患者自身が精神的苦悩をやわらげるのに「有用である」と考えるケアや方法を収集することは重要である。

本研究は、わが国ではじめて、がん患者を対象として、患者自身が精神的苦悩をやわらげるために有用と考える方策を収集した研究である。

【目的】

終末期がん患者から見て、①精神的苦悩をやわらげることに役だっていると考え、②精神的苦悩を強めていること、③精神的苦悩に対するケアニード（精神的苦悩をやわらげるために希望すること）、および、④精神的苦悩に対して自分で行っている対処方策を明らかにすること。

【対象】

全国の緩和ケア病棟11施設の通院・入院の成人がん患者のうち、調査に耐え得る身体状況であり、言語的コミュニケーションが可能な69名（66名が入院）、および、民間モニター会社に登録しているがん患者のうち、医師からがんが残存・再発しているとの説明を受けている20名の合計89名。（患者背景は表2参照）

【方法】

調査：60分の半構造化面接を1対1で行った。インタビューアーは患者の診療に関与していない看護師または臨床心理士が行い、会話内容を録音した。

面接内容：「現在、つらいことや心配していることや、今はそうでもないけれどこれまでにつらかったことや心配していたことはありますか？」と聞き、現在・過去における精神的苦悩の内容を明らかにした。患者の回答を、精神的苦悩の概念的枠組みの定義（表1）にしたがい、精神的苦悩それぞれの有無を明確化した。

次に、精神的苦悩をやわらげることに役立っていること・強めていること・ケアニード・患者の対処方策を明らかにするために、「そのとき、医師や看護師、ご家族のどのような対応や療養環境がお気持ちを楽にしてくれましたか、お気持ちをたらくしてしまいました

か?」「医師や看護師、ご家族、また療養環境にどのようなことが必要でしょうか?」「お気持ちが少しでもやわらぐようにご自身で工夫していることはありますか?」と聞いた。

解析：記録された会話をテキストデータ化し、精神的苦悩をやわらげることに役だっている・強めていること、精神的苦悩に対するケアニーズ、対処方策について述べている部分を抽出し、意味内容を表すユニットに分割した。精神的苦悩をやわらげることに役立っていること、強めていること、ケアニーズ、対処方法は重複して語られていたため、精神的苦悩をやわらげるための方策としてまとめてカテゴリー化した。どの精神的苦悩に対しても該当する内容は「すべての精神的苦悩に関すること」に分類した。

【結果】

89名の患者に対して、最大2回、延べ102回のインタビューが行われた。

患者からみて精神的苦悩の緩和に役立っている方策として、5つの共通した方策に加えて、8つの苦悩それぞれに対して、あわせて38の方策が抽出された(表3)。

【考察】

すべての精神的苦悩に患者が求めることとして、「よくきいてくれる」、「気持ちをわかって一緒に考えてくれる」ことが繰り返し語られた。患者が「よくきいてくれる」、「わかってもらえた」と感じられるためのコミュニケーションの重要性が強く認識された。

身体的コントロールの喪失、希望のなさ、死の不安といった複数の精神的苦悩において、「理由を見だし受け入れる」という対応策が繰り返して見いだされた。また、苦しさをやわらげると患者自身が考える方策として、「予測される経過や予後をあらかじめ聞いて自分でもいろいろなことを決める」と、「死のことは考えずに普通に毎日を過ごす」との両方があった。この結果は、わが国の終末期がん患者にとって、死を正面からとらえて「できることは何でもしておく」という対応のみが有用というわけではなく、「(起きることを変えようとせずに結果を)一所懸命に受け入れようとする」、「死を意識せずに毎日毎日に焦点を当てて生きる」という対応も有用であることを示唆する。これは、現状を変化させることによってではなく、「受け入れる」ことに努力することで適応してきたと言われる日本人の無常感を背景とした死生観や、人間は自然の一部であるとする自然観の特徴を示している可能性がある。

【結論】

今後、精神的苦悩を訴えるがん患者に対応するすべての職種へのコミュニケーション教育方法の確立と効果の実証が必要である。

臨床では、精神的苦悩をやわらげるという観点から、死についての患者の価値観に沿った方策を尊重することが重要である。